

## ロシア語における数詞句と格付与について

後藤雄介

東京外国語大学大学院博士後期課程

gotou.yuusuke.j0@tufs.ac.jp

### 要旨

ロシア語において、数詞+NP からなる数詞句は、その非常に複雑な形態統語的特徴をめぐり多くの研究が存在する。その中で、本稿では数詞句(および内部)の格表示と格付与について考察する。従来の研究では、数詞句が構造格環境にある場合、数詞と NP の格は異なり、NP は数詞から数量属格を付与されるが、語彙格環境にある場合は数詞と NP の格が同じになる。統率・束縛理論の枠組みでは、どちらのパターンでも数詞句内の要素への格付与は“1度のみ”起こる。一方で、現行の極小主義プログラムの枠組みにおいては、語彙格環境の数詞句では NP の格素性の値の“上書き”が生じてしまう。本稿は、格素性の値の上書きを排除した分析を提示し、構造格環境と語彙格環境のいずれにおいても、数詞と NP の格は同じになることを提案する。そして、適切な格表示のパターンを導くためには、顕在的な冠詞を持たないロシア語においても DP の投射が必要であることを論じる。

### 1 はじめに

ロシア語において、数詞+NP からなる数詞句 (Numeral phrases; 以下、NumP と表記) は、その非常に複雑な形態統語的特徴をめぐって、数多くの研究が存在するが (e.g., Pesetsky 1982, Babby 1987, Franks 1995, Bailyn 2004, Pereltsvaig 2006, Pesetsky 2013)、未解決の問題も多い。その中に、NumP 内部の要素の格表示と格付与の問題がある。格表示に関しては、主要部 Num と補部の NP の格が異なる場合 (1a) と、両者の格が同じになる場合 (1b) とに分かれる。前者は NumP 全体に構造格が付与される環境で生じ、Num は NP にいわゆる数量属格 (genitive of quantification; 以下、グロスでは genq と表記) を付与する (Babby 1987)。後者の場合は NumP 全体に語彙格 (ロシア語では、属格・与格・具格・所格) が付与される環境で生じる。Babby (1987) は前者を heterogeneous なパターン、後者を homogeneous なパターンと名付けた。

- (1) a. pjat' stolov  
       five-nom/acc desks-genq  
       「5つの机」
- b. s pjat'ju stolami  
       with five-ins desks-ins  
       「5つの机と」

この2つの格表示のパターンを適切に導くにはどのような句構造を想定すべきか、そしてどのような格付与のメカニズムが必要かという点で、現在に至るまで議論が続いている。詳細は2.で検討するが、統率・束縛理論の枠組みにおいては、NumP 内の要素への格付与は“1回のみ”であるが、現行の極小主義プログラムの枠組みにおいては、格素性の値の“上書き (overwrite)”が生じてしまう。本稿の目的

は、極小主義プログラムの枠組みを採用した上で、格素性の値の上書きを排除した分析を提案することである。そして、その分析を採用した上で、適格な格表示のパターンを導くためには、顕在的な冠詞を持たないロシア語においても、DPの投射が必要であることを論じる。したがって、本稿の分析は普遍的DP仮説 (Universal DP hypothesis; e.g., Pereltsvaig 2007) を支持するものであり、統語構造の通言語的な普遍性をさらに示唆するものである。

## 2 議論の出発点

Babby (1987) は、上記の heterogeneous なパターンと homogeneous なパターンを導くために、以下の主張をしている。まず、格は句の最大投射に付与され、その後付与された格素性の値が句の内部に浸透 (percolate) するとしている。この分析によれば、名詞を修飾する形容詞等は、名詞と格に関して一致するのではなく、名詞句の最大投射から格素性の値を浸透によって受け取ることになる。その上で、Babby は以下の格の階層を提案した。

- (2) 語彙格 > 数量属格 > 主格/対格 (Babby 1987: 116)

この階層によれば、数量属格の付与は主格/対格、すなわち構造格より優先され、語彙格は数量属格より優先される。

以下、(3) で具体例を検討する。(3a) にて、動詞 *kupil* 「買った」は対格を付与する。そのため Num *pjat'* 「5」は対格形だが、NP *knig* 「本」は Num から付与された数量属格形となっている。この場合、NP が対格形の *knigi* だと非文になる。一方、(3b) では、動詞 *vladeet* 「マスターしている」は具格 (= 語彙格) を付与する。この場合、Num *pjat'ju* と NP *jazykami* 「言葉」の両方が具格表示であれば適格だが、NP が数量属格形 *jazykov* だと不適格になる。

- (3) a. On *kupil pjat' {knig / \*knigi}*.  
 he bought five-acc books-genq / books-acc  
 「彼は5冊の本を買った」
- b. On *vladeet pjat'ju {jazykami / \*jazykov}*.  
 he master five-ins languages-ins / languages-genq  
 「彼は5つの言葉をマスターしている」

(3) を樹形図にして表わしたのが (4) である。樹形図 (4a) にて、NP は Num から数量属格を付与されうる位置であり、かつ、V によって付与された対格が NumP から浸透しうる位置でもある。すなわち、節点 NP で“数量属格と対格の競合”が起こる。この場合、Num には対格が浸透するが、上記の階層により、対格よりも数量属格の方が優先度が高いため、NP には対格は浸透せず、数量属格が付与される。一方、樹形図 (4b) では、NP は Num からの数量属格が付与されうる位置にあり、かつ、V によって NumP に付与された具格が浸透しうる位置にある。この場合では、格の階層により、具格の方が数量属格よりも優先されることから、NP には数量属格は付与されず、節点 NumP から具格が Num と NP 両方に浸透する。

- (4) a.
- ```

  graph TD
    VP --> V[kupil]
    VP --> NumP[NumP[acc]]
    NumP --> Num[Num[acc]]
    NumP --> NP[NP[genq]]
    Num --- pjat[pjat']
    NP --- knig[knig]
  
```
- b.
- ```

  graph TD
    VP --> V[vladeet]
    VP --> NumP[NumP[ins]]
    NumP --> Num[Num[ins]]
    NumP --> NP[NP[ins]]
    Num --- pjat[pjat'ju]
    NP --- jazyk[jazykami]
  
```

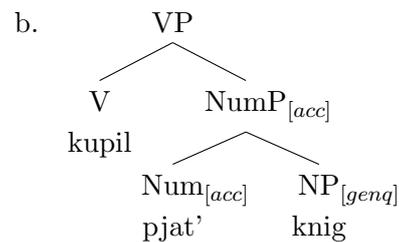
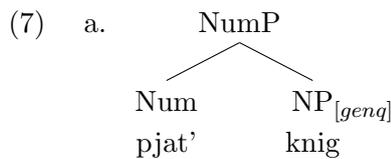
Babby (1987) はこのようにして、heterogeneous なパターンと homogeneous なパターンを導いた。加えて、Babby 自身が述べているように、この分析では、NP には格は 1 度のみしか付与されない。

- (5) 「私の前提となっているのは、NP は一度のみ格を付与され、ある格を別の格へ変えるような規則はない、ということである」 (Babby 1987: 96)

Babby の研究は、当時の統率・束縛理論 (Government and Binding theory; Chomsky 1981) では適切に NumP(内部) の格表示を説明出来ている。それは、当時の理論は表示に基づく理論であり、文の構造が一定程度出来上がった状態から各操作が始まるため、NumP 全体に構造格・語彙格のどちらが付与されるのかが前もって分かるからである。言い換えれば、NP から見て、Num から数量属格を付与されるのか、あるいは、より上位の位置にある格付与子から構造格・語彙格が付与されるのかが分かる、ということである。

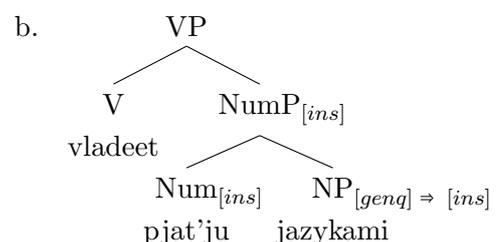
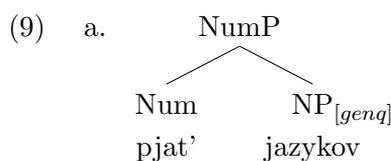
では、極小主義プログラム (Chomsky 1995) の枠組みでは、格付与が“1 回のみ”という上記の考えは維持できるのだろうか。現行の理論では、併合 (merge) により“下から上へ”構造が構築される。このことから、Num が NP と併合した時点で、Num は NP へ数量属格を付与することになる (7a)。次に、NumP 全体に構造格が付与されると、Num には構造格が浸透する (7b)。一方で、NP は既に格素性の値が決まっているため (=数量属格が付与されているため)、NumP に付与された構造格は NP には浸透しないと考えられる。

- (6) On kupil pjat' knjig.  
he bought five-acc books-genq  
「彼は 5 冊の本を買った」



しかし、NumP が語彙格を付与される場合、問題が生じる。まず、構造格環境の場合と同じように、Num は NP へ数量属格を付与する (9a)。したがって、NP の格素性の値は NumP の完成時点で決定済みであるということになる (=数量属格が付与されている)。つまり、語彙格環境の場合においても、派生の途中で NP は必ず数量属格が付与される段階を含んでいる。その後 NumP に語彙格が付与されると、Num には語彙格の値が問題なく浸透するが、適格な格表示を得るには、NP にも浸透しなければならない。つまり、一度 NP に数量属格が付与されるものの、格の階層により語彙格の値が上書きされなければならない (9b)。

- (8) On vladeet pjat'ju jazykami.  
he master five-ins languages-ins  
「彼は 5 つの言葉をマスターしている」



このことから、現行の枠組みを採用した場合、語彙格環境の NumP 内部では必然的に格素性の値の上書きを認める必要が出てくる。しかし、一度決定した格素性の値が、派生の後の段階で上書きされるといふ事態は経済的ではなく、理論的に望ましいとは言えない。上記の問題を回避するために、「語彙格環境の場合、Num は NP へ数量属格を付与しない」という規則を設定する考えもあり得るかもしれない。しかし、その場合、Num は NP と併合した時点で、その後語彙格付与子から語彙格が付与されるということが“見えている”ことになる。すなわち、先読み (look-ahead) が生じてしまうため、やはり、理論的に望ましくない。

### 3 提案と分析

本稿では、現行の理論的枠組みを採用した上で、格素性の値の上書きを排除した分析を提案する。まず、分析の前提として、Babby (1987) や Norris (2014) にならい、本稿でも格はまず句の最大投射へ付与され、その後句の内部の要素へ浸透すると考える。次に、2. での問題を再度確認しよう。語彙格環境で格素性の値の上書きが生じてしまうのは、派生の途中で Num が NP に数量属格を付与する段階を必ず含むからであった。そこで、本稿は、構造格環境であれ語彙格環境であれ、「Num は NP へ格付与しない」ことを提案する。これにより、NumP の完成時点では、NP の格素性の値は“未決定”ということになる。

そして、NumP のレベルで以下の書き換え規則を設定する。

(10) Str. Case  $\Rightarrow$  genq/\_\_\_+[範疇素性 *num*]

この規則は、節点 NumP に構造格が付与される場合、節点 NumP が持つ範疇素性 [*num*] により、その格素性の値を数量属格へ書き換える、というものである。この書き換えが起こることで、数量属格の値が NumP 内部の要素へ浸透する。すなわち、Num と NP は“どちらも数量属格を付与される”のである (11a)。したがって、従来、数詞の主格形/対格形として考えられてきた語形は、実際は、数量属格形ということになる。一方、この規則は構造格にのみ言及しているため、NumP に語彙格が付与される場合は、この規則は適用されず、語彙格素性の値は NumP から下へそのまま浸透する (11b)。つまり、この分析では NP が持つ格素性の値の上書きは生じない。このことから、語彙格環境においても NP への格付与は 1 回のみとなる。

(11) a. 
$$\begin{array}{c} \text{NumP } [Str.Case] \Rightarrow [genq] \\ \swarrow \quad \searrow \\ \text{Num } [genq] \quad \text{NP } [genq] \end{array}$$
 b. 
$$\begin{array}{c} \text{NumP } [Lex.Case] \\ \swarrow \quad \searrow \\ \text{Num } [Lex.Case] \quad \text{NP } [Lex.Case] \end{array}$$

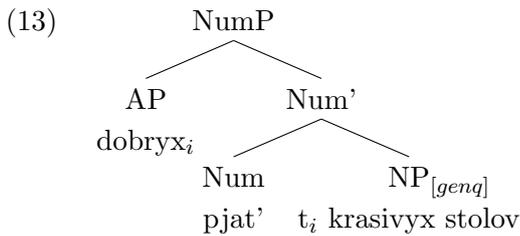
この分析によれば、語彙格環境の場合と同様に、構造格環境においても Num と NP の格は同じになる。つまり、NumP 内部は常に homogeneous なパターンの格表示ということになる。

次に、この分析を採用する経験的なメリットについて検討する。ロシア語において、*dobryj* 「たっぶり、かなりの」や *polnyj* 「余すところのない、まるまる」、*celyj* 「まるまる、～も」などの一部の形容詞 (以下、*dobryj* タイプの形容詞と呼ぶ) は、(12) で示すように、数詞に先行する位置を占め、数量属格形表示になる (以下、構造格環境の場合、数詞のグロスは nom/acc ではなく、genq と表記する)。

(12) a. *dobryx pjat' krasivyx stolov*  
good-genq five-genq beautiful-genq desks-genq  
「かなりの 5 つの美しい机」 (Pesetsky 2013: 57)

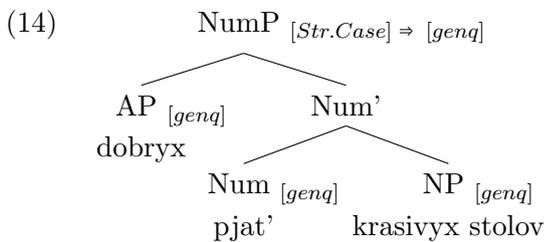
b. *polnyx sem' let*  
full-genq seven-genq years-genq  
「まる 7 年」 (Franks 1995: 100)

*dobryj* タイプの形容詞への格付与については、Corbett (1979), Pesetsky (2013) による移動のアプローチがある。具体的には、樹形図 (13) で示すように、当該の形容詞は NP 内で基底生成され、Num から数量属格を付与された後に移動する、というものである。



しかし、Babby (1987) が述べているように、*dobryj* タイプの形容詞がなぜ移動するのか、という理由が判然としない。

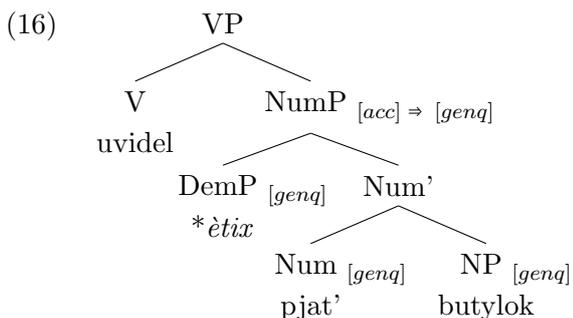
そこで本稿では次のように分析する。樹形図 (14) に示すように、まず、*dobryj* タイプの形容詞は NumP の指定部で基底生成されると考える。そして、NumP に付与された構造格が数量属格に書き換えられた後に、数量属格が指定部の形容詞 (および Num と NP) へ浸透する。こう考えることで、*dobryj* タイプの形容詞の移動は不要となる。



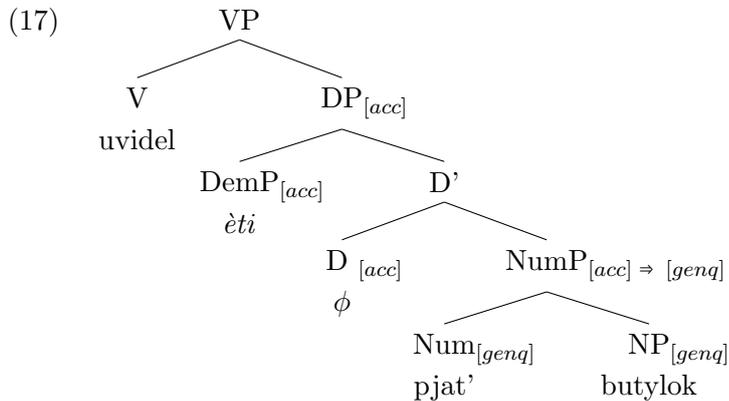
一方で、本稿の提案のままでは誤った予測をする事例もある。指示代名詞や所有代名詞、*poslednij* 「最近の、この前の」、*pervyj* 「最初の」といった形容詞 (以下、*poslednij* タイプの形容詞と呼ぶ) は数詞に先行し、かつ、構造格が付与される場合、主格・対格形表示となり数量属格形表示だと非文になる (15)。この点で、*poslednij* タイプの形容詞は、*dobryj* タイプの形容詞とは異なる格表示の振る舞いを見せる。

- (15) a. Ja vypil {*poslednie* / \**poslednix*} pjat' bol'six butylok vina.  
 I drank last-acc / last-genq five-genq big-genq bottles-genq wine-gen  
 「私は最後の 5 本の大きなワインボトルを飲んだ」 (Babby 1987: 118)
- b. Ja uvidel {*èti* / \**ètix*} pjat' butylok.  
 I saw these-acc / these-genq five-genq bottles-genq  
 「私はこれらの 5 本のボトルを見た」 (Babby 1987: 109)

樹形図 (16) で示すように、もし指示代名詞や所有代名詞、*poslednij* タイプの形容詞が、*dobryj* タイプの形容詞と同様に、NumP の指定部に位置すると考えると、NumP から数量属格が指定部に浸透してしまい、非文を適格文であると誤って予測してしまう。



そこで、本稿では、顕在的な冠詞を持たないロシア語においても、NumP より上に DP の投射が存在すると想定する。具体的には、Pesetsky (2013) にならい、指示代名詞や所有代名詞、*poslednij* タイプの形容詞は DP の指定部の位置で併合され、D の位置は空であるとする。構造格から数量属格への書き換え規則のトリガーは、範疇素性  $[num]$  であるため、それを持たない DP (内の要素) では書き換えが起こらず、DP に付与された構造格がそのまま内部へ浸透することになる。樹形図 (17) にて、動詞 *uvidel* 「見た」は DP へ対格を付与する。対格は DP 指定部の DemP と空の D、そして NumP まで浸透する。しかし、NumP のレベルにて構造格から数量属格への書き換え規則が適用されるので、NumP は数量属格となり、以降の要素に数量属格が浸透する。

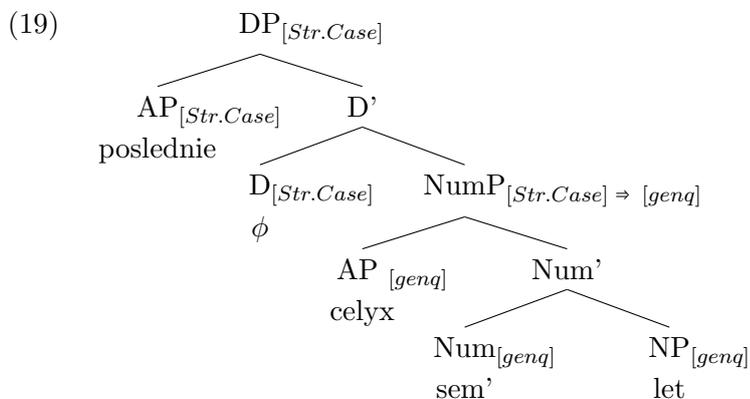


“顕在的な冠詞を持たない言語が DP の投射を持つか否か”という点については現在も活発な議論が続いているが (e.g., Bošković 2005, 2009, Pereltsvaig 2007)、本稿の分析は冠詞を持たないロシア語にも DP の投射が存在する、つまり、普遍的 DP 仮説を支持することになる。

また、Pesetsky (2013) は *poslednij* タイプの形容詞と *dobryj* タイプの形容詞が共起する例を挙げている。

- (18) *poslednie celyx sem' let*  
 last-nom/acc whole-genq seven-genq years-genq  
 「このまる 7 年間」 (Pesetsky 2013: 58)

このような例に関しても、本稿の分析では自然な説明が可能である。すなわち、*poslednij* タイプの形容詞は DP 内にあるため数量属格は付与されず、構造格が付与される。一方で、NumP の指定部にある *dobryj* タイプの形容詞 (および Num と NP) については、節点 NumP で構造格が数量属格に書き換えられるので、それが浸透する (19)。



*poslednie celyx sem' let* 「このまる 7 年間」という句の内部の語句は、従来の分析と本稿の分析とで格のパターンが大きく異なる。

- (20) a. 従来の分析: [*poslednie*<sub>nom/acc</sub> *celyx*<sub>genq</sub> *sem'*<sub>nom/acc</sub> *let*<sub>genq</sub>]  
 b. 本稿の分析: [*poslednie*<sub>nom/acc</sub> *celyx*<sub>genq</sub> *sem'*<sub>genq</sub> *let*<sub>genq</sub>]

従来の分析では、主格形/対格形と数量属格形が交互に顕われるパターンであった。しかし、本稿の分析では主格形/対格形が数量属格形に変わると、以降は数量属格形のままというパターンになる。従来の分析では複雑に見える格表示のパターンが、本稿の分析ではシンプルなパターンとして再解釈される。

## 4 おわりに

本稿では、ロシア語における NumP(内部)の格表示と格付与について考察した。節点 NumP のレベルで、構造格が数量属格へ書き換わるという規則「Str. Case ⇒ genq/\_\_\_+[範疇素性 *num*]」を設定することで、現行の枠組みでは語彙格環境の NumP 内で生じてしまう格素性の値の上書きを排除した。このことから、構造格環境でも語彙格環境においても、NumP 内部の要素の格表示は常に同じになる。また、数詞に先行する指示代名詞・所有代名詞や *poslednij* タイプの形容詞の格表示を導くために、DP の投射を想定した。このことは、普遍的 DP 仮説を支持し、統語構造の通言語的な普遍性をさらに示唆するものである。ただし、本稿冒頭で述べたように、ロシア語の NumP は多くの未解決の問題を有している。今後、検討する事例を拡大し、提案の妥当性の確認と修正が必要であることは言うまでも無い。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 (JP18K00526; 研究代表者: 匹田剛) の助成を受けている。

## 参考文献

- Babby, Leonard. 1987. Case, prequantifiers, and discontinuous agreement in Russian. *Natural Language & Linguistic Theory* 5:91–138.
- Bailyn, John. 2004. The case of Q. In *Proceedings of formal approaches to Slavic linguistics: The Ottawa Meeting*, ed. Olga Arnaudova, Wayles Browne, Maria Luisa Rivero, and Danijela Stojanović, 1–35. Ann Arbor: Michigan Slavic Publications.
- Bošković, Željko. 2005. On the locality of left branch extraction and the structure of NP. *Studia Linguistica* 59:1–45.
- Bošković, Željko. 2009. More on the no-DP analysis of article-less languages. *Studia Linguistica* 63:187–203.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding: The Pisa lectures*. Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. Cambridge: MIT Press.
- Corbett, Greville G. 1979. Adjective movement. *Nottingham Linguistic Circular* 8:1–10.
- Franks, Steven. 1995. *Parameters of Slavic morphosyntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Norris, Mark. 2014. A theory of nominal concord. Doctoral Dissertation, UC Santa Cruz.
- Pereltsvaig, Asya. 2006. Small nominals. *Natural Language & Linguistic Theory* 24:433.
- Pereltsvaig, Asya. 2007. The universality of DP: A view from Russian. *Studia Linguistica* 61:59–94.
- Pesetsky, David. 1982. Paths and categories. Doctoral Dissertation, MIT.
- Pesetsky, David. 2013. *Russian case morphology and the syntactic categories*. Cambridge: MIT Press.